九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

書紀歌謡二音節名詞の表記について : アクセント語類との関連をめぐって

高山, 倫明
九州大学大学院博士課程

https://doi.org/10.15017/10493

出版情報：文獻探究. 12, pp.47-55, 1983-07-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

書紀歌謡二音節名詞の表記について
―アクセント語類との関連をめぐって―

高山倫明

万葉仮名（音仮名）は、字音を借りて日本語を写した、いわゆる〝借音仮名〟であるが、中国原音との相関性を分析する際、従来は超分節的要素を捨象して考えることが多かったようである。筆者は先に、日本書紀β の音仮名表記の一部において、音仮名の原音声調が日本語のアクセントをある程度反映しているのではないかとの推定を行なったが、それは主として書紀古写本に見られる声点との比較対照作業を通じてのものであった。[1] 本稿では、特に二音節名詞をとりあげ、アクセント語類とのかかわりから、この問題の考察を試みようと思う。

○

書紀歌謡一二七首（全一二八首のうち、難訓歌として未だ定訓を見ない122番歌謡＝斉明紀童謡＝一首を除く）から、二音節名詞を取り出すと、延べ三三一語、異なり語数にして一四四語を数えることができる。[2] （複合語の要素となっているものはここではとりあげない。）それらの語彙を、音仮名の原音声調（調類）によって分類すると、以下のようになる。[3] 但し同一語彙の異表記（例えば「山」（やま）における野麻・夜麻・耶麻 など）も少なくないので、表記された語の総計は右の異なり語数をいくらか上まわることになる。

〔用例の下に所在を示す。漢数字は巻数、アラビア数字は歌謡番号。同一歌謡内に複数の用例を見る時は、その数だけ歌謡番号を記す。〕

〈平平〉

。阿煩（明日）十五86　。阿曾（朝臣）九29 十62　。阿層（同上）九28
。阿彌（網）二3　。阿梅（天・雨）十60 十三72　。伊開（池）十七97
。伊齊（地名）三8　。伊波（岩）廿四107　。于池（内）九28
。于知（目上）九29　。紆陪（上）十七97　。紆鳴（魚）十七97
。於彌（臣）十六91 廿七127　。柯稽（鶏）十七96　。伽鮮（禮）十39
。伽多（方）七21　。柯陁（野）十四75　。伽彌（司）九32
。柯微（神）廿四112 112　。岐農（衣）七27　。倶伊（梅）廿七124
。倶梅（氏族名）三73 14　。倶謨（雲）廿六116　。虔虔（此処）十一43
。渠騰（言）廿四109　。居登（事）十四75　。渠梅（米）廿四107 107
。之之（猪）十四75 廿六117　。斯斯（目上）十四75　。之褒（塩）十41
。斯麻（島）十四75 75　。之麻（目上）廿四109　。齊多（地名）九30 31
。曾虔（其処）十一43　。陁該（蔵）十四75　。多知（太刀）五20 七27
。陁麻（玉）廿七125　。陁絮（誰）十六93　。知余（千代）廿二102 102
。都梅（頭）廿七124　。騰岐（時）廿七125　。那伽（中）十35
。儺羅（地名）十一54　。波刀（鳩）十三71　。波那（花）十35 十三67
。梁那（目上）廿五114　。彌知（道）十37 38　。毛苔（本）三13
。模騰（目上）廿五114　。耶麻（山）廿六119　。由羅（地名）十41

〈平上〉

。阿武（蚊）十四75 75　。阿母（母）十四82　。伊蕃（今）三10 10 10 10 三12
。伊母（妹）廿五114　。于受（髻華）七23　。于旋（地名）十一42
。柯彼（地名）十四81 81　。倶儛（国）十七96　。虔等（琴）十41

。居等(葦)十七99　。多倍(稗)十四74　。知麽(地名)十34
。那爾(何)廿五114 廿六116。奴底(鐸)十五85　。耶陛(八重)十六88 90
。耶麽(山)十四79

〈平去〉

。阿藝(吾君)九29 十35　。阿誤(吾子)三8 8 10 10　。阿磨(天)二3
。阿妹(天)二2　。阿喩(鮎)廿七126 126　。阿例(吾)十一45 廿七126
。伊戒(池)十36　。伊制(地名)十四78 78　。伊硯(岩)九32
。伊幣(家)廿四111　。伊茂(妹)二5　。伊慕(同上)十40 十七96 96 廿五113
。伊暮(目上)十一43　。于儀(地名)三7　。於度(親)廿二104
。加礙(蔭)十三72　。伽未(神)十37　。區珥(國)七22 十34 十一54 62 62
。俱珥(同上)十一63　。區茂(蜘蛛)十三65　。解蟹(鵲)三7
。恩麻(鯨)十六87 95　。之利(俊)十37 38　。須衛(末)十六89
。西渡(迫門)二3　。蘇餓(氏族名)廿三103 103　。多智(太刀)廿二103
。多磨(玉)二2　。多例(誰)十一44　。都磨(妻)十七96
。苔利(鳥)九30 31　。幡舍(山名)十三71　。婆利(孫)十四76
。麻蒐(松)七27 27　。麁帝(前)七24　。彌企(御酒)九32 32 33 33
。耶賦(八符)十六91　。和例(吾)十一63 63　。倭例(同上)十七96 96 廿四110 111
。鳥志(鴛鴦)廿五113　。鳥膩(老翁)廿四107

〈上平〉

。以祇(地名)十七99　。宇知(内)十一62　。禹知(同上)廿六119
。禹林(上)廿六116　。宇彌(海)十三68　。哥波(河)十七97
。枳彌(君)十三68 廿二104　。矩羅(鞍)十四81　。愷那(毛野)十六98
。許辭(膳)十一51　。始陁(下)十六91　。等能(殿)五16 17
。母滕(本)廿七126 126　。母能(物)十五84

〈上上〉

。宇倍(上)十一60 十四76　。宇麽(馬)十四79　。矩爾(國)十四75 82
。學始(膳)廿四106　。莒等(琴)十七97　。莽紀(真木)十七96
。美古(御子)廿七127　。野陛(八重)廿七127　。野麽(山)十四77 77

〈上去〉

。以稽(岩)十一45　。古磨(駒)廿五115 115　。柁例(誰)十四75 80 廿五113
。等茂(伴)三12　。等利(鳥)三12 十35 十七96　。等唎(同上)十七96
。爾播(庭)十四74 十七96　。府曳(笛)十七97　。輔曳(同上)十七98
。武志(虫)十四75

〈上入〉

。乃樂(地名)十六95

〈去平〉

。飫斯(地名)廿四106　。佐鳥(稗)十一42　。駅開(竹)十七97
。奈疑(水葱)廿七126　。臂苔(人)十一42　。臂毛(紐)十三66
。赴尼(船)十一51　。未那(皆)十35　。茂能(者)十一50
。茂能(物)十一55　。暮能(同上)十六94　。曳陁(枝)十四76

〈去上〉

。企珥(君)二6　。奈爾(何)廿七128　。奈礼(洲)廿二104
。斗娜(膚)十三69　。破奪(浜)十一48　。臂等(人)十三71
。度麽(山)十四77 79

〈去去〉

。飫企(沖)二5　。箇破(河)十一53 56　。箇利(雁)十一62 63
。氣蒐(人名)廿三105　。志々(猪)十四76　。志磨(島)二4
。磬改(夫子)十三65　。制利(芹)廿七126　。駅例(誰)十七97
。度珥(刀自)廿七124 124　。鄧利(鳥)二5　。播磨(浜)二4
。避奈(夷)二3　。賦屢(地名)十六94　。寐逗(水)十五83
。豫臂(實)十三65

〈入平〉

。乙登(弟)二2

〈入去〉

。憶金（沖）二4　。吉備（地名）十40　。賊振（其他）十四75

〈複調字を含む表記〉

◎瀰（平上）

〈一平〉。瀰穂（御木）七24　。瀰開（同上）七24　。瀰知（道）十二64

。瀰揶（宮）十一54　。瀰揶（同上）十一55

〈一上〉。瀰枳（御酒）五15 15　。瀰古（御子）十六88　。瀰野（宮）十五84

〈一去〉。瀰智（道）十35　。瀰致（同上）十五50 十四82　。瀰豆（水）十36

〈一鼻〉。瀰和（地名）五16 17 17

〈平一〉。于瀰（海）三8 廿六119　。於瀰（豆）十一44　。沓瀰（君）七44 十一47

〈上一〉。枳瀰（君）十一43 廿六123 123

〈去一〉。飫瀰（臣）十四74 十六88　。箇瀰（上）十六94

◎摩（鼻）

〈平一〉。阿摩（天）廿三102　。之摩（島）三12　。都摩（妻）十六87

。椰摩（山）三12 十一61 十三69

〈上一〉。宇摩（馬）廿二103　。古摩（駒）廿二103　。稚摩（玉）十六92

〈去一〉。志摩（島）十三70　。逗摩（妻）十六94　。菟摩（同上）十一52 十三69 69 70

。夜摩（山）七22 23 十三71

◎比（平上去）

〈一平〉。比苔（人）三9 9 11 七23 27　。比登（同上）十四79 十六93

。比鵝（同上）廿四110 111 廿五115　。比蘆（蘇）十五35

〈一上〉。比等（人）九33 十五35 十七97　。比母（姓）廿七127　。比礼（肩布）十九101

〈一去〉。比郡（人）二6　。比例（肩布）十九100

〈平一〉。伊比（飯）廿二104 104

◎匂（鼻）

〈一去〉。匂致（口）三14

〈上一〉。匂礼（地名）廿二103

◎和（鼻）

〈一去〉。和例（吉）三12 14 九28 28

〈平上一〉。瀰和（地名）⇒「瀰」の項

◎去（上去）

〈一上〉。去等（豆）十三70

〈一去〉。去鐸（今度）十三69

◎瑳（平上）

〈一平〉。瑳音（埼）十一48

◎鞞（平上）

〈平一〉。伊鞞（家）廿七124

◎輸（鼻）

〈平一〉。于輸（臼）九33

◎爲（鼻）

〈平一〉。那爲（地震）十六91

◎簸（上去）

〈上一〉。喝簸（河）十五83

◎軻（平上去）

〈一去〉。軻茂（鴨）二5

◎泥（平上去）

〈平一〉。于泥（地名）九31 十一43

次に、これらの語彙を各時代のアクセント資料とつきあわせ、可能な限りにおいてアクセント諸類への帰属を試みると次表のようになる。[4] 資料を左の如くに限ったこともあり、かなり曖昧な部分が残ってしまうが、不備な点は追い追い正すとして、今はまず大まかな傾向をとらえることに力を注ぎたいと思う。

さて、全体をひととおり見渡した限りにおいては、音仮名原音声調とアクセント諸類との間に相関性らしきものは見出し難いのであるが、書紀歌謡の音仮名表記を一律に扱ってはならぬことは、書紀区分論、わけても近年の森博達氏の所説の教えるところである。[5] そこで、以下、森氏の分類に従って、書紀歌謡をα群（巻十四～十九、廿四～廿七）とβ群（巻一～十三、廿二・廿三）とに分けて考えてみることにしよう。

〈表Ⅰ a〉は、β群所属の二音節名詞を音仮名の原音声調に

〈第一類〉

語	書紀	名義	古今	四座	補忘	平曲	全国ア	明解
魚ウヲ	上上	上上				●●	○̄○̄ 2A	○̄○̄
君キミ	上上	上上	上上		上上	●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
口クチ	上上	上上			上上	●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
国クニ	上上	上上	上上			●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
膳カシハデ	上上	上上				●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
駒コマ	上上	上上	上上			●●	○̄○̄ 1A	○̄○̄
崎サキ	上上	上上	上上				○̄○̄	○̄○̄
末スエ	上上	上上	上上		斗斗	●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
竹タケ	上上	上上				●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
誰タレ	上上	上上	上上		斗斗	●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
伴トモ	上上	上上	上上		斗斗	●●	○○ 2A	○̄○̄
鳥トリ	上上	上上	上上		上上	●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
庭ニハ	上上	上上	上上		斗斗	●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
勇ユウ	上上		上/上平				○̄○̄	○̄○̄
経キヘ	上上		上上	斗斗			○̄○̄ 0A	○̄○̄
笛フエ	上上	上上				●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
真木マキ	上上	上上					○̄○̄	○̄○̄
御子ミコ	上上	上上	上上			●●	○̄○̄ 2A	○̄○̄
道ミチ	上上		上上	斗斗		●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
水ミヅ	上上	平上	上上			●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
宮ミヤ	上上		上上			●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
虫ムシ	上上	上上	上上			●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
校ヲシ	上上	上上				●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
宵ヨヒ	上上	上上				●●	○̄○̄ 0B	○̄○̄

〈第二類〉

語	書紀	名義	古今	四座	補忘	平曲	全国ア	明解
岩イハ	上平	上平	上平			●○	○̄○̄ 2A	○̄○̄
肉カナ	上平	上平		斗十	上平	●○	○̄○̄ 0A	○̄○̄
上ウヘ	上平	上平	上平	斗十/斗平	上上	●○	○̄○̄ 0A	○̄○̄
形カタ	上平		上・			●○	○̄○̄ 2A	○̄○̄
方カタ		上平	上平			●○	○̄○̄ 2A	○̄○̄
河カハ	上/上平	上平	上上	斗十		●○	○̄○̄ 2A	○̄○̄
戦クラ	上平	上平				●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
事ツマ	上平		上平			●○	○̄○̄ 2A	○̄○̄
人ヒト	上平		上平	斗十	上平	●○	○̄○̄ 2A	○̄○̄
背ウナ	上平	上平				●○	○̄○̄ 2A	○̄○̄
八重ヤヘ	上平						○̄○̄ 2A	○̄○̄
鴛鴦ウシ	上上	上上	上上			●●	○̄○̄ 0A	○̄○̄
老翁ウナ	上上					●●	○̄○̄	○̄○̄

〈第三類〉

語	書紀	名義	古今	四座	補忘	平曲	全国ア	明解
明日アス	平平	平平				●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
天ヤマ	平平	平平	平平					
網アミ	平平	平平	平平			●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
池イケ	平平	平平			上平	●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
家イヘ	平平	平平		十十	上平	●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
馬ウマ	平平	平平				●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
沖オキ	平平		平平			●○	○̄○̄ 0B	○̄○̄

語	書紀	名義	古今	四座	補忘	平曲	全国ア	明解
弟オト	平平	平平	平平			●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
親オヤ	平平	平平	平平			●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
神カミ	平平	平平	平平		上平	●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
雲クモ	平平	平平	平平	十十		●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
言コト	平平	平平	平平			●○		○̄○̄
事コト	平平	平平	平平		上平	●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
米メ	平平	平平					○̄○̄ 2B	○̄○̄
禅ザン	平平	平平				●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
猪シシ	平平	平平				●○		○̄○̄
塩シホ	平平	平平	平平			●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
島シマ	平平	平平				●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
後ウシロ	平平	平平					○̄○̄ 2B	○̄○̄
芹セリ	平平	平。				●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
太刀タチ	平平	平平	平平	十十		●○	○̄○̄ 1B	○̄○̄
玉タマ	平平	平平	平平	十十		●○	○̄○̄ 1B	○̄○̄
時トキ	平平	平平	平平	十十	上平	●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
殿トノ	平平	平平	平平			●○		○̄○̄
水葱ナギ	平平	平平				●○		
浜ハマ	平平	平平	平平			●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
花ハナ	平平	平平	平平	十十	上平	●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
本モト	平平	平平	平平	十十	上平	●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
者モノ	平平	平平	平平	十十	上平	●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
物モノ	平平	平平	平平	十十	上平	●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄
山ヤマ	平平	平平	平平		上平	●○	○̄○̄ 2B	○̄○̄

〈第四類〉

今イマ	妹イモ	臼ウス	海ウミ	上カミ	司ツカサ	雁カリ	衣キヌ	悔クイ	鴨シガ	此処ココ	其処ソコ	中ナカ	何ナニ	汝ナレ	膚ハダ	船フナ	松マツ	吾ワレ
平上	平上	○上	平上	平上	上平	平上		平平	平上	平上	平上	平平	平上	平上	平上	平上	平○	平上
平上						平上	平上	平平	平上	平上	平上	平平	平上	平上	平上	平上	平上	平上
平上	平上		平上	平上	平上	平上	平上	平平		平上	平上	平上	平上	平上/上上		平上	平上	平上
					十斗(斗)							十斗(斗)	十斗(斗)			十斗(斗)		十斗(斗)
平上				平上	平上							平上	平上					
○●			○●	○●	○●	○●	○●			○●	○●	○●	○●				○●	○●
○○ 1B		○○ 1B	○○ 1B	○○ 1B	○○ 1B	○○ 0A	○○ 1B	○○ 1B		○○ 1B	○○ 1B	○○ 1B	○○ 1B		○○ 1B	○○ 1B	○○ 1B	○○ 1B
○○		○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○		○○	○○	○○	○○

〈第五類〉

今夜コヨイ	下シタ	鯖サバ	夫子セコ	瀬田セタ	追門セト	蘇我ソガ	蔡タク	桃タヘ	千葉チバ	千代チヨ	頭ツメ	刀自トジ	奈良ナラ	地震ナイ	鍔ツバ	幅舎ハカ	稼ハカ	篠シノ
上平	上上	平平	上上/平上	上上	平上	平上	平上	上上	平○	平平	上上	上上	上平	平上	上上	上上	平上	上上
	上平	上上								平平								上上
	上平		平上										上平/平平					
	斗十																	上平
	●●											●○						
	○○ 0A								○○ 0A	○○ 2B		○○ 2A	○○ 2A					○○ 2A
	○○				○○	○○	○○		○○	○○		○○	○○				○○	○○

〈保留〉

薩サツ	鴨カモ	蜘蛛クモ	琴コト	鳩ハト	前マヘ	薩サツ	獲カリ	鴨カモ	蜘蛛クモ	琴コト	鳩ハト	前マヘ	君アガ	子アヅ	朝臣アソミ	母アモ	吾ワレ	壱岐イキ	伊勢イセ	宇治ウヂ	宇陀ウダ	駱華ラクエ	飯イヒ	備ビ	久米クメ	吳クレ	毛津ケツ	毛野ケナ
上平/平平	平平	平平	平上	平平		平平	平平	平平	平平	平上	平平		平平	平上	平上	平上	平上	上平	上平	平上	平平		平上上平平上	平平	平平	上上	上上	上上
平上	平平	平平	平上		平平	平上																			平平/平上			
平上		平上	平上			平上											平上		上上	平平				平上	上上			
十斗(十)					十斗(十)																							
		平上																										
○●	○●				○●																							
○○ 1B	○○ 1B	○○ 1B	○○ 1B	○○ 0B	○○ 1B	○○ 1B	○○ 1B	○○ 1B											○○ 2A	○○ 1B								
○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○											○○ 2A	○○					○○			

今夜コヨイ	下シタ	鯖サバ	夫子セコ	瀬田セタ	追門セト	蘇我ソガ	蔡タク	桃タヘ	千葉チバ	千代チヨ	頭ツメ	刀自トジ	奈良ナラ	地震ナイ	鍔ツバ	幅舎ハカ	稼ハカ	篠シノ	心ココロ	良ユラ	符ハフ	輪ミワ	不ハフ	酒ミキ	留ハル	布ハフ	緑ミドリ	稼ハカ	舎ハカ	鍔ツバ	震ナイ	良ナラ	自ジ	頭ツメ	代チヨ	葉チバ	桃タヘ	蔡タク	我ソガ	門セト	田セタ	子セコ	鯖サバ	下シタ	夜コヨ
上平	上上	平平	上上/平上	上上	平上	平上	平上	上上	平○	平平	上上	上上	上平	平上	上上	上上	平上	上上	上平	上上	上上	上平		上上	上上		上上	平上	上上	上上	平上	上上	上上	上上	平平	平○	上上	平上	平上	上上	上上	上上	平平	上上	上平
	上平									平平								上上									上上																	上平	
	上平		平上										上平/平平									上平																							上平	
	斗十																																													
	●●											●○																																		
	○○ 0A								○○ 0A	○○ 2B		○○ 2A	○○ 2A											○○ 2A																						
	○○								○○	○○		○○	○○											○○		○○ ○○	○○											○○	○○	○○					○○	

Ia		第二音節 平		上	去	
第一音節	平	彌知(道)十 ① 于池(内)九 ② 于知(〃)九 ② 伽多(方)七 ② 阿彌(綱)二 ③ 之婆(塩)十 ③ 多知(太刀)五·七 ③ 波那(花)十·十三 ③ 毛苔(本)三 ③ 伽彌(司)九 ④ 岐農(衣)七 ④ 盧盧(此処)十一 ④ 曾盧(其処)十一 ④ 那伽(中)十 ④ 阿梅(天)十一 ⑤	阿梅(雨)十三 ⑤ 伽鮮(雉)十 ⑤ 波刀(鳩)十三 ⑤ 阿曾(鯛長)九·十一 阿層(〃)九 伊齊(伊勢)三 倶梅(久木)三 齊多(頭田)九 知余(十代)廿二 麗羅(奈良)十一 由羅(由良)十	伊蒼(今)三 ④ 盧蒼(牙)十 ⑤ 于愛(聖業)七 于祝(早治)十一 知盧(十葉)十	區珥(国)七·十·十一 ① 倶珥(〃)十一 ① 多例(誰)十一 ① 伊破(為)九 ② 阿盧(天)二 ③ 伊我(池)十 ③ 於波(親)廿二 ③ 伽末(神)十 ③ 之利(後)十 ③ 多智(太刀)廿二 ③ 多麻(玉)二 ③ 伊茂(妹)二 ④ 伊慕(〃)十 ④ 伊蒼(〃)十一 ④ 鮮鷲(鴨)三 ④	皆利(島)九 ① 麻苑(松)七 ④ 和例(君)十一 ④ 阿妹(天)二 ⑥ 加礙(蔭)十三 ⑤ 區茂(蜘蛛)十三 ⑤ 慶幣(前)七 ⑥ 阿蔓(吉名)九·十 阿誤(者子)三 阿例(者)十一 于儀(皇位)三 西渡(急門)二 蘇鐵(蘇我)廿二 憐舎(憐舎·山名)十三 彌企(御酒)九
	上	积彌(君)十三·廿二 ① 許鮮(膳)十一 ① 宇知(内)十一 ②	等能(殿)五 ③ 宇彌(海)十三 ④	宇諸(上)十一 ②	等茂(伴)二 ① 等利(島)三·十 ① 以播(先)十一 ②	
	去	臂毛(紐)十三 ① 臂苔(人)十一 ② 未那(皆)十 ② 佐烏(掌)十一 ③ 茂能(者)十一 ③	茂能(物)十一 ③ 赴尼(船)十一 ④	金弭(君)二 ① 臂等(人)十三 ② 破蕃(浜)十一 ③ 奈孔(泄)廿二 ④ 洋娜(層)十三 ④	鄭利(島)二 ① 避奈(夷)二 ① 撥臂(胃)十三 ① 箇破(河)十一 ② 飲企(沖)二 ③	志磨(島)二 ③ 播磨(浜)二 ③ 簡利(雁)十一 ④ 氣苑(玉津)廿二 暫故(天子)十三
	入	乙登(弟)二 ③			撓企(沖)二 ③	吉備(地名)十

Ib		第二音節 平		上	去	
第一音節	平	道 ①-①十 内 ②九 内 ②九 方 ②七 綱 ③二 塩 ③十 太刀 ③五 ③七 花 ③十 ③十三 本 ③二 司 ④九 衣 ④七 此処 ④十一 其処 ④十一 中 ④十 天 ⑤十一	雨 ⑤十三 雉 ⑤十 鳩 ⑤十三	今 ④④④④④④三 琴 ⑤十	国 ①七①十①①①十一 国 ①十一 誰 ①十一 岩 ②九 天 ③二 池 ③十 親 ③廿二 神 ③十 後 ③③十 太刀 ③廿二 玉 ③二 妹 ④二 妹 ④十 妹 ④④十一 鴨 ④三	鳥 ①①九 松 ④④七 君 ④④十一 天 ⑤二 蔭 ⑤十三 蜘蛛 ⑤十三 前 ⑤七
	上	君 ①十三 ①廿二 膳 ①十一 内 ②十一	殿 ③-③五 海 ④十三	上 ②十一	伴 ①三 島 ①三 ①十 岩 ②十一	
	去	紐 ①十三 人 ②十一 皆 ②十 稚 ③十一 者 ③十一	物 ③十一 船 ④十一	君 ①二 人 ②十三 浜 ③十一 泄 ④廿二 層 ④十三	島 ①二 夷 ①二 胃 ①十三 河 ②②十一 沖 ③二	島 ③二 浜 ③二 雁 ④④十一
	入	弟 ③二			沖 ③二	

Ⅱa		第二音節 平		上		去
第一音節	平	紆鳴(魚)十七 ①	斯斯(緒)十四 ③	倶倫(国)十七 ①		須陳(木)十六 ①
		陁翠(雑)十六 ①	斯麻(島)十四 ③	耶陛(八重)十六 ②		烏志(鶯鳥)廿五 ①
		伊波(岩)廿四 ②	之麻(・)十四 ③	居茅(事)十七 ③		烏胤(老翁)十四 ①
		紆陪(上)十七 ②	陁麻(玉)十七 ③	耶麻(山)十四 ③		都麻(妻)十七 ②
		柯陁(形)十四 ②	騰岐(時)十七 ③	伊母(妹)廿五 ④		伊弊(家)十四 ③
		阿須(明日)十五 ③	漫那(花)廿五 ③	那爾(何)廿五廿六 ④		伊慕(妹)十七廿五 ④
		伊閑(池)十七 ③	模騰(本)廿五 ③	阿武(虹)十四 ⑤		倭例(君)十七廿四 ④
		柯微(神)十四 ③	耶麻(山)廿六 ③	阿母(母)十四		阿喩(鮎)十七 ⑤
		倶護(雲)廿六 ③	倶伊(梅)十七 ④	柯彼(壁)十四		伊制(伊勢)十四
		渠騰(言)十四 ③	於彌(豆)十七	多倍(稲)十四		思寐(鮪)十六
		居登(事)十四 ③	柯稽(鶏)十七	奴底(鐸)十五		漫利(椽)十四
		渠梅(米)廿四 ③	陁該(袋)十四			耶賦(八岐)十六
		之之(緒)十四・廿六 ③	都梅(頭)十七			阿例(音)十七
	上		始陁(下)十六	矩倫(国)十四 ①	莒等(琴)十七 ⑤	古麻(駒)廿五 ①
		禹知(内)廿六 ②	以祇(忘岐)十七	繆始(勝)十四 ①		他例(誰)十四・廿五 ①
		禹林(上)廿六 ②		莽紀(真木)十七 ①		等利(鳥)十七 ①
		等波(河)十七 ②		美古(御子)十七 ①		等喇(・)十七 ①
		矩羅(鞍)十四 ②		宇倍(上)十四 ②		倫橋(庭)十四・十七 ①
		母滕(本)十七 ③		野陛(八重)十七 ②		府鬼(笛)十七 ①
		母能(物)十五 ③		宇麻(馬)十四 ③		輔鬼(・)十七 ①
		慣那(毛野)十六		野麻(山)十四 ③		武志(虫)十四 ①
	去	駅閑(竹)十七 ①		夜麻(山)十四 ③		駅例(誰)十七 ①
		鬼陁(枝)十四 ①		奈爾(何)十七 ④		寐蓮(水)十五 ①
		奈疑(水葱)十七 ③				志々(猪)十四 ③
		暮能(物)十六 ③				制利(芹)十七 ③
		飫斯(忍)十四				度琪(刀自)十七
						賦摩(比丘尼)十六
	入					賦擬(其処)十四 ④

Ⅱb		第二音節 平		上		去
第一音節	平	魚 ①十七	緒 ③十四	国 ①十七		木 ①十六
		誰 ①十六	島 ③③十四	八重 ②②十六		鶯鳥 ①十五
		岩 ②十四	島 ③十四	事 ③十七		老翁 ①十四
		上 ②十七	玉 ③十七	山 ③十四		妻 ②十七
		形 ②十四	時 ③十七	妹 ④十五		家 ③十四
		明日 ③十五	花 ③十五	何 ④十五④十六		妹 ④④十七④十五
		池 ③十七	本 ③十五	虹 ⑤十四		君 ④④十七④④十四
		神 ③③③十四	山 ③十六			鮎 ⑤十七
		雲 ③十六	梅 ④十七			
		言 ③十四				
		事 ③十四				
		米 ③③十四				
		緒 ③十四③十六				
	上	内 ②十六		国 ①①十四	琴 ⑤十七	駒 ①①十五
		上 ②十六		勝 ①十四		誰 ①①十四①十五
		河 ②十七		真木 ①十七		鳥 ①十七
		鞍 ②十四		御子 ①十七		鳥 ①十七
		本 ③③十七		上 ②十四		庭 ①十四①十七
		物 ③十五		八重 ②十七		笛 ①十七
				馬 ③十四		笛 ①十七
				山 ③③十四		虫 ①十四
	去	竹 ①十七		山 ③③十四		誰 ①十七
		枝 ①十四		何 ④十七		水 ①十五
		水葱 ③十七				猪 ③十四
		物 ③十六				芹 ③十七
	入					其処 ④十四

よって分類したものである。[6] 縦の欄が第一音節の原音声調、横の欄が第二音節のそれを示している。右で第一類～五類に分類した語彙につき、その類別を①～⑤の番号で示したが、この表からはそれら各類の分布にこれといった傾向を見出すことは難しいようである。〈表Ⅰb〉では表記された延べ数だけ①～⑤の記号を表示したが、そこでも事態に変化はなさそうである。

次に、以群所属の二音節名詞について同様の分類を行なったのが〈表Ⅱa〉及び〈表Ⅱb〉である。これらの表になると先程と違って、そこに若干の傾向性を見てとることができそうに思われる。すなわち、

(i)《上－去》（上が第一音節の、下が第二音節の声調を示す。以下同様）の欄には、第一類名詞（①）のみが存する。

(ii)《平－平》の欄は第三類名詞（③）が多数を占め、③はこの欄に集中する傾向を見せる。

などがそれである。そのほか、《上－平》の欄に第二類名詞（②）が比較的多いこと、第四類名詞（④）は全体的に数が少ないが、そのほとんどが《平－非平》の欄に存すること、なども一応は指摘できようか。

尤も、各類の分布差は微妙なものであり、明瞭さを欠くことは見てのとおりである。ただここで注意されるのは、右にいう傾向性の〝例外〟となるものの多くが巻十四～十七及び巻廿七所属のものである点で、同じく群でも巻廿四～廿六のものに限って見るならば――母例数の少なくなる分だけ説得力が減じることにもなりそうだが――各類の分布差はかなりはっきりしてくるのである（表Ⅲ）。すなわち、第一類名詞（①）は《上－非平》の欄、第二類名詞（②）は《上－平》の欄、第三類名詞（③）は《平－平》の欄、第四類名詞（④）は《平－非平》の欄に、といった具合である。

Ⅲ		第二音節 平	第二音節 上	第二音節 去
第一音節	平	岩 ②#1 神 ③-③-③#1 雲 ③#4 言 ③#1 米 ③-③#1 緒 ③#4 島 ③#1 苑 ③#2 本 ③#2 者 ③#3 山 ③#3	妹 ④ 何 ④#2 ④#4	鶯 ① 鴛鴦 ① 老 ③ 家 ③ 妹 ④ 吾 ④-④
	上	内 ② 上 ②	腰 ①#1	駒 ①-①#2 誰 ①
	去			

ところで、平安時代後期の代表的アクセント資料日類聚名義抄[7]における二音節名詞各類への差声が、原則として

第一類　2 2
第二類　2 1
第三類　1 1
第四類　1 2
第五類　1 1・1 2・1 f

〈いわゆる平声点・上声点・平声軽点を、字音調類の呼称と区別する意味で、仮りに1・2・fと記す。〉

となっていることは、あらためて言うまでもなかろう。今、差声にゆれのある第五類を仮りに除いて考えると、ここでのアクセント標示は、第一類と第二類、第三類と第四類のペアで第一音節のマークを等しくし、一方、第二音節では、第一類と第四類、第二類と第三類がペアとなってマークを等しくしているわけである（下図参照）。

右に見た各類の分布が、ちょうどこれと平行的な位置関係を有していることは注目すべき点であろう。筆者はかつて、巻三及び巻廿四～廿六の音仮名表記において、原音声調の調類と後世の書紀古写本における声点の加点状況に、

〈原音声調平声――1声点
　　〃　非平声――非1声点

		第二音節 1	第二音節 2
第一音節	1	③	④
	2	②	①

の如き〝対応〟が、傾向として看取されることを指摘した。(7) そこから、それらの巻々の音仮名表記に書紀述作時の日本語のアクセントの反映が期待されるとの推論を得たのであるが、二音節名詞アクセント語類を通じての観察からも、ほぼ同様のことが言えそうに思われる。

ちなみに、巻三については、用例が極度に少ないため分布差と呼べるものは残念ながら見られない。ただ、わずかな用例ではあるが、その現れ方はまがりなりにも巻廿四～廿六の場合に準じているかのように見える（表Ⅳ）。

Ⅳ		第二音節		
		平	上	去
第一音節	平	本 ③	今 ④④④④④④	鵡 ④
	上			伴 ① 鳥 ①
	去			

○

以上、全般的に用例が少なく、種々の問題を残したままではあるが――各語彙のアクセント語類への帰属に関する部分など、殊になおよく考えるべき点が多い――、一応、書紀音仮名表記の一部において、原音声調の調類の組み合わせとアクセントとの間にある程度の関連を見出すことができたように思う。しかしさらに三音節・四音節名詞あるいは他の品詞へと考察を広げる必要があろう。後考に俟ちたいと思う。なお、音仮名原音の頭子音（声母）における有声無声の別もピッチと関連をもったかと思われるので(8)「韻鏡」の清・次清・濁・清濁の枠組みで細分した表も別に作成してみたのだが、これといった傾向は見出せなかった。この場合、陰調と陽調の別はひとまず考慮外に置いてよさそうに思う。

〔注〕

(1) 拙稿「原音声調から観た日本書紀音仮名表記試論」（「語文研究」51）

(2) 歌謡本文は大野晋氏『上代仮名遣の研究』後篇に拠る。なお複合語の要素となっているか否かの判定に明確な基準を設けているわけではないので、ここに示した用例数は確定的なものではない。

(3) 原音声調は王仁昫刊謬補訳切韻（A.D.七〇六年頃と推定）に拠る。

(4) 語彙の類別には以下の資料を参照した。

・書紀―日本書紀古写本声点

・名義―類聚名義抄（観智院本、図書寮本）

・古今―秋永一枝氏『古今和歌集声点本の研究』索引篇・研究篇(上)

・四座―金田一春彦氏『四座講式の研究』

・補忘―補忘記

・平曲―奥村三雄氏『平曲譜本の研究』

・全国ア―平山輝男氏編『全国アクセント辞典』

・明解―金田一春彦氏監修『明解日本語アクセント辞典』

(5) 森博達氏「《日本書紀》歌謡における万葉仮名の一特質――渡字原音から観た書紀巨合論――」（「文学」四五二）

(6) 原音において複数の声調を有する音仮名＝音仮名による語彙の合類の際、複調字と仮称したもの＝を含む表記は以下の表に載らない。

(7) 注(1)拙稿では巻廿七も巻廿四～廿六と同列に扱ったのだが、その後に出した論考（未刊）では対応率の低さから間に一線を画した。なお本誌10号の拙稿「書紀歌謡音仮名と原音声調」での観察結果においても巻廿四～廿六と巻廿七の間には上声字・去声字の出現率に若干の傾向差が看取された。

(8) 書紀音仮名には全濁声母無声化の現象が反映しており、原音の体系では清濁に代って音節発端高度の差が弁別的であったかと思われる。

――九州大学大学院博士課程――